

INTERVIEW

県北西部地域医療センター 国保白鳥病院 病院長
廣瀬英生先生



ネットワークの基点の病院長として、 広域全体の地域医療を考える。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

地域医療のメッカで、地域医療の面白さを知る

山田隆司(聞き手) 今日とは岐阜県の県北西部地域医療センター国保白鳥病院に廣瀬英生先生を訪問しました。廣瀬先生はこの4月から、後藤忠雄先生の後を継いで国保白鳥病院の病院長に就任されました。先生にはこれまでも地域医療振興協会の岐阜県支部長を担当していただき、また昨秋からこの「月刊地域医学」の編集委員も務めていただいております。岐阜県の卒業生の中心的な存在です。本来はもっと早くお話を伺わなくてはいけなかったのですが、やっとその機会を得てやって参りました。今日はいろいろなお話を伺いたいと思います。

早速ですが、先生が卒業されてからここに至

るまでの経歴を簡単に紹介していただけますか。

廣瀬英生 私は自治医科大学を平成13年に卒業しました。24期生です。県立多治見病院で2年間の初期研修を行った後は、まず下呂市の小坂診療所に2年行き、その後下呂温泉病院の循環器に1年行きました。それから高山市の久々野診療所に1年行って、義務年限最後に当時の和良病院に赴任しました。義務年限でいわゆるへき地といわれる下呂市、高山市、郡上市を体験したという感じですね。

山田 下呂温泉病院は後期研修ということですか。

廣瀬 普通のへき地派遣でした。

山田 和良に赴任した時にはもうすぐ義務が明けるといいますか。

廣瀬 あと1年というところで和良に赴任しました。その時はまだ病院で、半年後に診療所にするということで建設中でした。

山田 そこから後藤先生とのコンビが始まったわけですね。それ以来ここに移る前はずっと和良だったのですか。

廣瀬 そうです。13年和良にいて、最後の4年間は県北西部地域医療センターを立ち上げるために後藤先生がこちらに移られて、私が和良診療所の所長を務めました。それからここにきました。

山田 地域が本当に長いのですね。結局後期研修はしなかったのですか。

廣瀬 はい。後期研修をすることも考えてはいましたが、当初地域医療というものがあまりよく分からなかったのですが、和良で地域全体をみる医療というものを始めてみて面白いと思い、和良で続けようと思いました。

山田 和良はもともと岐阜県の地域医療のメッカみたいなところでしたからね。私が医学生の頃は中野重男先生や校条恒久先生がおられて、まさに和良の地域医療創成期でした。地域活動が盛んで夜の公民館での活動などの話を中野先生に伺った記憶があります。

廣瀬 私が行った頃にも15地区を回って健康の話や和良診療所に対する要望、意見を聞くという会を、2週間に1回ぐらいやっていました。

山田 和良は以前から人口減少が深刻ですよ。

廣瀬 現在年間で大体50人減っています。私が着任したときは2,200人で、私が去る直前には1,500人くらいでした。

山田 若い人にとっては職場もないし、生活そのものが難しい場所ではありますよね。でもその割には卒業生が比較的大勢集まって、後藤先生のリーダーシップのもと地域医療の魂を受け継ぎ、それが原動力になって県北西部地域医療センターという枠組みになったわけですね。

複数の医療機関・医師で広域の地域医療を支える仕組み

山田 県北西部地域医療センターについて教えていただきたいのですが、和良にいた時期にこの白鳥病院から声がかかったのですか。

廣瀬 私が最後の4年ぐらいの時、前年に当時の白鳥病院の院長が退職されました。岐阜大学の医局からは院長職は派遣されず、他の医師も平均年齢が60歳を超える医師が多かったのです。その後どうするのか？ということになったのです。一方で、和良は人口減少していましたが、

診療所には医師が3人いて、3人も必要なのか？という話が出ていた時でした。そういう意味ではタイミングが合ったのだと思います。

山田 白鳥病院は郡上八幡からも距離があるし隣には私立の病院もあるので、大学としては国保の病院とはいえ、派遣を維持していくプライオリティが高くなかったということでしょうね。

廣瀬 そうですね。われわれの方では、当時伊左次悟先生が白川診療所に11年くらい頑張っておら